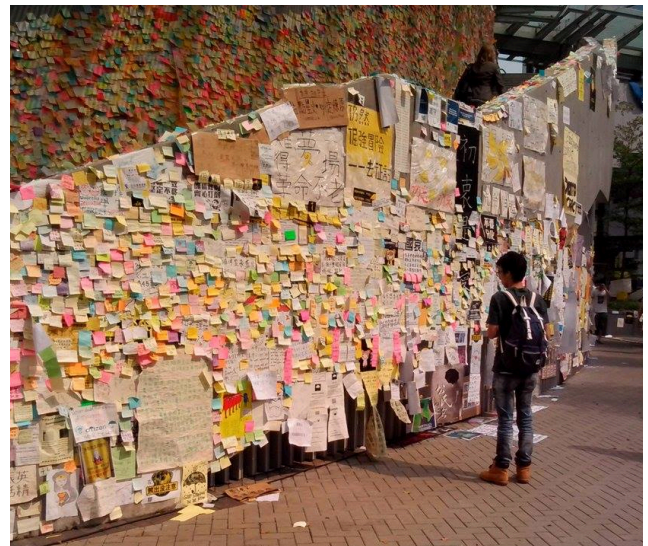




レノンウォールに貼られた市民のメッセージ
(下) と、路上の雨傘アート (左)



現代人間論系公開講演会

「香港雨傘運動の中の性/別(ジェンダー)と国境を越える政治」

2014年、香港で行政長官の普通選挙を求める「**雨傘運動**」が始まった。総参加者120万人以上と言われ、香港の人口700万人のうち、1/6の人々が参加したことになる。香港中心部は、学生や若者、労働者の平和・非暴力の座りこみで占拠（オキュパイ）され、民主派の学者や政治家、宗教者たちが後押しをした。

運動のモチーフである黄色い雨傘のアートやパフォーマンスが路上に花開き、「レノンウォール」と名づけられた壁に付箋で数万を超えるメッセージが貼られた。占拠地では中高生のための自習コーナーや、大学教員の青空講義などがひらかれ、音楽が演奏された。こうした経験は政治的な達成とは別に、人々に大きな勇気と解放感をもたらしたと言われる。

しかし、雨傘運動の初期から、運動を抑え込もうとする側にも、運動の内部にもジェンダーや性差別を利用する現象があると指摘されていた。座りこみを攻撃する側が、「痴漢部隊」を結成して女性（と一部の男性）デモ

参加者に性的攻撃を加えた他、デモ隊内部で性別分業が推奨されたり、デモ参加者からの「3人から結婚相手を選ばせてやるって、全員ブスだったらどうする」というような発言も頻繁にあったという。（行政長官選挙で中国政府が候補者を指名するとしたことを揶揄）

また、市民の運動を考える際に、どのように国境を超えたつながりが可能になるかも重要なテーマである。日本では短絡的に、香港と中国の対立として語りがちだが、香港の自由の先には、中国の市民の自由があり、さらに日本を含めた他の東アジアの国や地域の自由とも、この問題は地下でつながっている。

本講演会では、雨傘運動の中の女性たちの声を記録した『**傘の下のガールズ・ロック**』を上映し、LGBT運動に参加する、大陸からの留学生が見た雨傘運動を描く『**種を飛ばせ**』を参考として紹介する。この二本のドキュメンタリー映画を通し、社会運動の中でのジェンダーと国境を越える政治について考えたい。